

創立の聖年のための
靈的歩み



第2段階

2022年11月21日-2024年2月10日

第2段階

聖年：立ち返りとゆるしの時

2023年2月22日灰の水曜日 -4月6日聖木曜日

師によって解放され、癒された弟子たちは
贖いの日に、角笛を吹き鳴らす。

あなたたちのためのヨベルの年である。

(レビ記 25,9-10 参照)

主なる神の霊がわたしの上におられる。

打ち砕かれた心の傷を包み、

捕われ人には自由を、

主の恵みの年を告げ、

シオンのゆえに嘆いている人々を慰めるために、

主はわたしを遣わされた。

彼らは正義の櫟の木と呼ばれ、

わたしは彼らとどこしえの契約を結ぶ。

(ルカ 4、イザヤ 61,1-3.8 参照)

主によって選ばれた旧約のイスラエルのように、わたしたちもまた、恵みの年の告げ知らせを受けましょう。そのためには、旧約の民にとって贖いの日の祝祭であったように（レビ記 23,27-32 参照）、全教会と共に悔い改めの季節である四旬節を生きながら、回心の時を準備する必要があります。なぜなら、わたしたちも神のご計画にいつも完全に応えてきたわけではなく、自分自身と姉妹を傷つけて、神が示された道から逸脱したことを知っているからです。

今年、永遠の契約として新たにされるわたしたちの召命の呼びかけを輝きをもって気づきながら、わたしたちが洗礼において受け（わたしたちは、祝日の聖書朗読A年を生きています）、そこから花開く聖別奉獻によって意味が新たにされる婚礼の衣装を再び身にまといまいます。

四旬節の歩みによって清められ、刷新されて、わたしたちは今、復活した主を観想し、主の過越に与り（ローマ 6,5 参照）、主の光の中で、そして、主に従うわたしたちの日々の聖別奉獻の中で、わたしたちの主との婚姻関係を理解しましょう。

わたしたちの修道会の創立の出来事は、教会の中で、十字架の刻印を伴う紆余曲折を経て成熟しました。この第2段階で、わたしたちは、神の忠実さと憐れみに対して、怠惰や競争心のためにあまりにもしばしば応えなかったことを認めるために、知性をもって、個人の過去と修道会の過去に戻るよう招かれています。わたしたちは、和解/浄化/赦しの道に踏み出すことの重要性を認識し、すべての源には造り主であり主である神の慈悲深く再生する働きがあることを認めるよう、すべての姉妹を招きます。

総長 Sr.M.ミカエラ・モネッティは、チルコラーレ n. 2/2022 で次のように言っています。

「聖年は、神からの賜物に感謝する恵みの時です。「わたしは、いにしえの日を思い起こし、あなたのなされたことをひとつひとつ思い返し、御手のわざを思いめぐらします」（詩編 143 参照）と詩編作者が祈るように、申命記で言われる思い起こす時です。それは、わたしたちの罪と人間性が持つ脆さのせいで、わたしたちが引き起こし苦しんだ分裂と傷、不忠実さと矛盾との和解の時です。神の賜物と招きとは取り消されないもの（ロマ 11,29 参照）であり、神が忠実な方であることに確信し信頼をもって前を見つめる時です。師イエスとの出会いによって変容され 言葉と行いをもって最初に告

げ知らせる勇気ある福音の女性となるよう新しい世代を招き続けてくださる師イエスへの信頼を新たにする時です。《イエス・キリストはあなたを愛し、あなたを救うためにいのちをささげられた。キリストは今なお生きておられ、日々あなたのそばであなたを照らし、力づけ、解放してくださる》（『福音の喜び』164）」

わたしたちは皆、わたしたちの間で、共同体の中で、地区の間で、パウロ家族の中で、わたしたちの歴史を特徴付け、しばしば現在にも影響を与えている傷ついた関係の経験があります。このことに気づくこと、個人的なレベルだけでなく、団体的なレベルでも、それを神の父性に引き渡すことは、赦しと初めの計画に戻るという解放と再生の経験を生きる準備をすることを意味します。この意味で、聖年は**戻る**時です。

すべての地区において、受け与えた傷を認め表現し、まず第一に、神によって、次にわたしたちの間でも、受けたり与えたりしたゆるしの再現と抱擁を表現する、**和解または祝祭の時を準備してください**。それらは、この四旬節の期間にだけ限定すべき歩みや経験ではなく、霊的な繊細さ、方法、および和解の恵みを歓迎し享受するのに役立つ状況によって、もっと長い期間にわたって延長することもできます。

深めと祈りのために役立つテキスト

カリスマテキストより

師イエズス修道女への講話 (APD)

ここで、聖師のような心、つまり、すべての人を愛する心を持つように願うことが大切です。つまり、「すべての人は、みな私のもとに来なさい」(マタイ 11,28) という心です。そして、使徒たちに「すべての被造物に福音を宣べ伝えなさい」(マコ 16,15) と(イエスは) 命じます。すべての人々のところに出かけていきなさい。今、ここに聖パウロの模範があります。祈願文¹で次のように祈ります。「主よ、あなたは聖パウロを通して、多くの人々を導かれました……」と。偉大な心、イエスの心になつた聖パウロの心です。

イタリアでは、この人は南部の人、この人は北部の人、と地域によって人を区別するほど、心が偏っています。心を広げましょう。というのも、イタリアの中ではこういう傾向があっても、海外に行けばナショナリズム(愛国心)をより強く感じるものです。大きな広い心! 海外に行けばいろいろなことに順応して、その地域を愛さなければなりません。そして、良いものは取り入れ、悪いものは見ても取り入れないということです。その国の言語を受け入れたように、特にさほど困難なく、いろいろなことに順応していくことです。わたしたちは、日本人がイタリア人のようにイタリア語を話せるとは決して思っはいけません! いろいろなことにあわせていくのです。神の御子はわたしたちのところまで降りてきて、わたしたちと同じように肉体と魂を取られたのです。罪以外のすべてにおいて、わたしたちと似た者となられたのです。だから、海外に出るならば、悪いこと以外、その国の人と似たものになるのです。そして、食べ物や気候などあらゆるものと習慣に順応していくことです。大きな広い心をもって始めましょう。そして、北部の人、南部の人、スペ

¹ 日々のローマミサ典礼書(ラテン語-イタリア語) 6月30日聖パウロの祝日の集会祈願

イン人、アメリカ人の姉妹が、できるだけ修道院に混在していることは益となります。絶対とは言いませんが、そうすると、すべての地域のための修道女を養成することになりますから、メリットもあります。しかし、一般的には、イタリア人の上長を一定年数、海外に置くことは有益です。そして、現在行われていること、すなわち、外国からの志願者や選ばれた姉妹たちが、イタリアで修練することは大切です。あるいは、少なくとも、一定の時間を母院で過ごし、その習慣や考えを取り入れることによって、修道会の最大の善である一致を維持することです。一致。一致を攻撃する人は修道会を攻撃するのであり、分裂を作り出す人なのです。

海外へ遣わされるということは、カトリック教会の心をもっていくということです。カトリックは普遍的という意味です。広い心を持つこと。そして、それぞれの国において、聖師の弟子たち（師イエズス修道女）は、次の三つのことを目標とします。第一に、養成の家を作ること、第二に、その国の教会のために典礼センターを設立すること、第三に、『キリストと教会におけるいのち (La vita in Cristo nella Chiesa)』²のような独自の定期刊行物を発行することです。どれかをまず始めて、その後他の物を実行し、可能な限り実現しましょう。この三つを常に目指してください。修道会から生まれるすべての善を様々な国々にもたらすこと、それは、キリストにおいて修道会を理解するということで、つまり、あなた方が聖師イエスの敬虔な弟子（師イエズス修道女）であるということを理解することなのです。

そして、彼（イエス）はどのようになさったのでしょうか？「すべての人」、「すべての人」、これです。だから、すべての人のことを考え、すべての人のために、特に福音の光がまだ届いていない、あるいはその光が妨げられている、または十分に届いていない人々のために、インド、中国、東洋の人々、アフリカの人々のために祈り始めなさい。アフリカは他の国々と比べて地理的には近いのに、カトリックの教えを受け入れるのが遅れているのです。しかし、近年は大きな進展がありました。アフリカに人材を派遣してほしいとい

² 1952 から PD によって発行されている典礼月刊誌

う要望は非常に多いので、養成が必要です。謙虚であること、祈ること、わたしたちがすべての国の人々のところに行くに相応しい存在であるために。謙虚さ、相応しさがあること、そして、自分の美しい召命を信じること。つまり、美しい召命があれば、その召命に見合った美しい恵みがあるのです。信仰。修道会の全体が聖霊の働きによって満たされるためです...だから、小さなつまらないことにこだわらないことです。こっちの鼻は長い、あっちの方は短いなどというつまらないことではなく、心を大きくしなさい。(……)なぜ、そんな小さなことにこだわらなければならないのですか?そんなことは小さなことなのです。

第二に、大きな心の他に重要なもの。それは適応力、順応性です。今日はこの仕事、明日は違った使徒職、今日は総長であっても明日は厨房、今日は学生で明日は厨房ということもあり得ます。順応性。神の御心に抵抗することなく、固執しすぎて自分を閉ざしてしまうことなく、心を尽くして神に捧げることが必要なのです。これが愛なのです。心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛すること。……何より、第一に師イエズス修道女(敬虔な弟子)であり、わたしたちの人格はキリストに一致して(溶け込んで)います。"キリストに一致した(溶け込んだ)"とは、修道会に一致した(溶け込んだ)ということです。ですから、聖化とは、修道会から派遣されるすべての使徒職に適合するよう、これを準備することにかかっています。そうです、あなたは師イエズス修道女(聖師イエスの弟子)です。そして、わたしたちの心はイエスの心と溶け合わなければなりません。わたしたちの心はイエスの心と溶け合い、彼の考え、彼の感情、彼の望み、彼の徳とともに、イエスが本当にわたしたちの中で生きてくださるように。³

(信心業の実践の中で)最も簡単に緊張を緩めてしまうのは、良心の究明であり、それは外部からのコントロールがないためです。良心の究明の実践は、志願期中、修練期中、あるいは有期誓願期の中に時々行うことではなく、その習慣をつける必要があることを指摘されています。修道者がこれらの実践(良心の究明、黙想、礼拝)

³ APD 1957,159-162.

を欠いたとき、気分が落ち込み、まるで何かが欠けているような、聖体拝領を切望しているのに、それを阻まれたような、一日が何か空しいような、イエスがまったく近くに感じられないような、そんな気持ちになるものです。必要性を感じることに、それに至るまでこれらの信心業の実践を味わい、慰め、霊の充満を感じることで、努力を要しないわけではありませんが、わたしたちは努力そのものを楽しみます。刈り入れの努力、自分の中に入る努力、神とより親密にコミュニケーションをとる努力なのですから。

第一：良心の究明 良心の究明とは、皆さんもよくご存じのように、神の前での自分の身分、意識、知識をはっきりさせることです。わたしたちは神のために創られ、神のもとへ行くのです。それがわたしたちの唯一の目的であり、人生における唯一の願いです。最高の善であり永遠の幸福である神のもとへ行きたいと願うことです。身分：修道女。共同体において：上長への義務、姉妹への義務、目下の者への義務。そして、わたしは本当に修道会と親密な関係にあるのでしょうか、修道会の考え、修道会のプログラム、修道会の望み、修道会の精神、修道会の使徒職について、どのように感じているのでしょうか？各自が自分の立場を確認する必要があります。そして、わたしは姉妹たちとどのように関わっていますか？良い行動がとれていますか？わたしは、良いお手本になっていますか？会に平和はありますか？喜びはありますか？自分たちの立場を検証することです。わたしには務めがありますが、どのようにそれを果たしていますか？どのようにそれを理解していますか？どのように務めを愛していますか？どのように思いを込めていますか？自分の体調に合わせて、本当にわたしに出来る限りの活動に専念しているのでしょうか？わたしは修道会に貢献しているのでしょうか？修道会に所属することは、各自がしなければならぬ貢献があることを意味します：修道会への貢献を通して神に対してするために、各自が持っているものを共通の利益にもたらすこと。自分自身の立ち位置を確認します。

一方、自分自身を究明しなくなると、人生の歩みにおいて盲目となり、時には盲目の先導者、つまり傍らにいる他の人たちや接することによって影響を受ける人たちの盲目の先導者にもなってしまうの

です。人が怠けるとどうなるのでしょうか？その結果は、自分の欠点を忘れて、他人の弱さを調べ始めるのです。わたしたちは高慢になり始め、もはや自分に何が欠けているのかよく分からなくなり、そして、自分を偉大なものだと信じ込み、祈りの中で、本当に必要な恵みを求めなくなります。従って、従順はより難しく、愛は、さらに難しくなるのです。

しかし、良心の究明の実践は、第一に、受けた恵みについて考えること、第二に、どのように応えたかを考えることです。**究明で行う最初の点は、常に受けた恵みについてです。**なぜなら、恵みと比例して義務も発生するからです。人は持っていないものを、神に与えることはできませんし、主もそれを要求されることはありません。40歳まで生きた人と50歳まで生きた人がいたとして、40年で永遠を迎えた人は、40年分だけ主に説明する必要があります。一方、50歳で永遠の眠りについた人は、さらに10年分の責任を負わなければならないのです。そして、より多くの知性を持つ者、より多くのインスピレーションを持つ者、よりはっきりとした聖性への招きを感じる者、より多くの教えを受けた者、より健康である者も、同じことです。主に感謝を捧げましょう。

そして、自分が受けた恵みに応えたかどうかを調べるのです。例えば、もし自分の健康をすべて使うなら、もし自分の知性をすべて主のために使うなら、もし修道会と使徒職の利益のために自分を捧げるなら、そう、自分がどれだけ学べたか、どれだけ勉強できたか、を調べるのです。

また、良心の究明では、常に自分の欠点の原因に目を向けることです。多くの場合、それは自尊心であり、自分はふさわしいものではないという理由で、神との親密さを失っているのです。それは多くの場合、生温さ、無関心、信心業、特に他のことの中に現れる、少しばかりの怠惰でありうるのです。このように、苦しめるようなねたみが時々心の中に生まれることがあります。そして、ねたみが生じると、思考や感情、そしていのちさえも圧迫してしまいます。そう、カインがそうであったように。そして、良心の究明の際には、常にまず内面、すなわち思考と感情、次に言葉、そして行動を調べること。人は思ったことを言い、望むことをするものです。

ですから、すでに何度も繰り返されてきたことに注意してください。良心の究明において、わたしたちは、自分自身を知るため、裁かれるために神の法廷に行くのではなく、すでに裁かれたからこそ行くのだということを知るために、もっと恵みと光が必要であるということを、常に心に留めておいてください。そしてそれは、わたしたち自身がすでに認識し、わたしたち自身が自分の振る舞いを判断し、それを根絶するために悪に対してゆるしを求めたことを意味します。つまり、すでに裁かれているのです。そして、人生の後に、わたしたちは正確な吟味を受けること、行なった善を見出すのに役立つと同時に、悪いことを見出すのにも役立つと考えて、よりよく究明を行うようにしましょう。「主よ、わたしがわたしを知ることができますように」、そうです「わたしがあなたを知るために」（聖アウグスティヌス）。聖パウロの言葉にもあります。「自分自身に気を配りなさい。」（1テモテ4章16節）⁴

『大きな木の根』⁵

「ジャックカルド神父の手帳」に、彼はこう記している。

1947年4月3日、アルバ

祝福されたイエス、この聖木曜日に、聖体と司祭職と典礼の誕生の日に、おとめである教会の胎内から、（彼女たちの）法的、霊的、神秘的誕生を、聖ヨセフのように迎えるために、あなたはわたしを与えてくださったのです。あなたの敬虔なる弟子たち（師イエズス修道女会）は、あなたの愛により、あなたの愛のうちに、あなたの愛から、新しく充実した特別ないのちによって、聖師への献身から、聖体と司祭職と典礼の修道女となるために、あなたの愛から生まれました。アーメン！

⁴ APD 1959,27-28.

⁵ 『大きな木の根』2 PDDM ローマにて2000年に発行 p. 179

『生活の規範』より

43.

パウロ的養成の過程は、回心への絶え間ない歩みである。それは他の人々のために、他の人々と共に働くこと、また、共同体で生活することができる統合された人格の成長のうちに聖性をめざしている。

この聖化と使徒職の道のりにおいて、使徒の女王マリアと使徒聖パウロ、アルベリオーネ神父とマードレ・スコラスチカが、わたしたちを導く。

63.

わたしたちは、教会の中に生きておられるキリストにおいて、御父の計画を実現するために、聖霊に満たされ喜びにあふれた姉妹の共同体を作るよう招かれる御父を賛美する。

このたまものに応え、交わりの実りを歴史の中に広げていく三位一体の神が宿る人間共同体となっていく。

65.

みことばと聖体の食卓を囲むよう呼び集められたわたしたちは、そこに現存される主から力を汲み取る。

生活の喜びや困難を分かち合いながら、対話の力と共同責任において共に成長していく。

聖体が和解の源泉であることを理解し、御父がゆるしてくださるよう忍耐力深い愛で互いにゆるし合う。

わたしたちは、一人ひとりの姉妹の才能を感謝し、互いの違いを受け入れる。

姉妹の必要を気遣い、その成長の度合いに敬意を払い、くつろぎの時を持てるよう配慮する。

71.

召命の歴史の中で、神は、家族である修道会の権利と義務を伴う一員となるように、わたしたちを呼び、強くまたやさしく働かれた。神がわたしたちと交わされた契約に、わたしたちは忠実であるよう、また、受けたたまものを共通の善のために活用するよう力を尽くす。

姉妹の側近く、特に困難な時期にある姉妹に同伴する。
永遠に忠実である主への信頼を新たにしながら、確信と愛をもって互いに勇気づけ合う。
わたしたちは、試練の時にも揺らぐことなく、祈りにおいて堅忍し、希望のうちに喜びに溢れて歩む。
奉獻生活の価値に対する信仰が衰えないよう、そして、「聖人たちが受け継いだ栄光に満ちた宝」を理解できるよう神に願う。

134.

神のことばと聖体によって形づくられるわたしたちは、時のしるしに心を配り、多文化間の対話に開かれた使徒的な共同体を築いていく。道・真理・いのちである唯一の師イエスを伝えることを務めとし、絶え間ない回心の道を歩む。

恵みの記念のために重要な日

1987年3月24日：サンフレ（イタリアのクネオ県）において、マードレ・スコラスチカ・リバータ帰天⁶

1924年3月25日：8名のポストランテが着衣し、創立者の手のもとに、私的誓願を立てる。オルソラは神のみ摂理のSr.スコラスチカの名を受ける⁷。そして、長きにわたって、3月25日が修練者の修道誓願初宣立の日となる。

1947年4月3日：聖木曜日、教区法承認のヴィルジヌス・エクレジエの教令が公布される⁸

1884年4月4日：ヤコブ・アルベリオオーネがサン・ロレンツォ・フォッサーノに生まれる⁹

⁶ «ローマ1987年3月25日 - 神のお告げの祭日- チルコラーレNo.3. この祭日が始まろうとするとき（前晩の祈りの間）、すべての師イエズス修道女にとって特別な時となりました。師イエスは、マードレ・マリア・スコラスチカ・リバータを天の共同体にお呼びになりました。…創立者の心から直接受けたカリスマを完全に生きた母として姉妹としての模範を彼女のうちに見いだしながら、彼女の取り次ぎを求めて、特別な時を表現しましょう»。PDDMの総文書保管庫にあるマードレM.テクラ・モリーノのチルコラーレ

⁷ 『大樹の起源を見る』 44～46 ページ参照（ページ数はイタリア語原本のもの）

⁸ 『大樹の起源を見る』 177～180 ページ参照（ページ数はイタリア語原本のもの） 引用文

⁹ ヤコブ・アルベリオオーネは、貧しい農家に生れ、堅実なキリスト教的な生活と労働を教えられる。（『生活の規範』2条参照）

**CONGREGAZIONE DELLE
PIE DISCEPOLE DEL DIVIN MAESTRO**
Casa Generalizia – Via Gabriele Rossetti, 17 – 00152 – Roma

<http://pddm.org>